

和歌山における天王寺工匠の関わりと社殿意匠の整理

大 給 友 樹

要 旨

有田川町に所在する白岩丹生神社本殿は、天王寺工匠の手によって建てられたことが、棟札の記述により明らかになっている。また、各部材の彫刻様式についても、大阪府に所在する類例との共通点が多く認められた。和歌山県内において、この種の中世から近世にかけての建築を、大阪府内の類例と比較しつつ整理し、各建物との相関性を検討した。その結果から、主に有田川町・紀美野町・紀の川市・和歌山市周辺において直接的な関わりが存在することを示す。

第1章 天王寺工匠の影響を感じさせる社殿の特徴

1. 身舎正面の欄間意匠について

天王寺工匠の手による社殿において、最も特徴的なのは身舎正面の意匠である。白岩丹生神社本殿は頭貫を虹梁形とし、内法長押を枕捌¹⁾に納めて、鴨居との間には彫刻欄間を入れる。既往研究では、このような手法が大阪府下で伝播していたことに言及している²⁾。白岩丹生神社本殿と共通した特徴を有する社殿として東田中神社境内社旧竹房神社本殿(以下:旧竹房神社本殿)や加太春日神社本殿などが挙げられる(表1)。

白岩丹生神社本殿の欄間には竹の節付透彫欄間を嵌める。竹の節間の彫刻は椿、菊、犬枇杷(か)を主題とする(写真1)。旧竹房神社本殿も似た仕様であるが、現在は彫刻欄間は取り外され、中古材の横板を嵌める。なお、彫刻欄間については神社で別途保管されている。旧竹房神社本殿の欄間の仕様は、竹の節を入れずに彫

刻を連続させ、両端部を線形状に表現している(写真5)。線形状の表現は、天王寺工匠の関わりが指摘される慶長8年建立の積川神社本殿(岸和田市)の脇障子欄間⁴⁾や、加太春日神社本殿の身舎正面の鴨居と虹梁形頭貫間の竹の節付透彫欄間にも認められる(写真7)。

一覧表で和歌山と大阪の類例を建立年代順に整理すると、身舎正面の内法長押を「枕捌」とし、「透彫」の彫刻欄間を配する仕様は、白岩丹生神社本殿と杭全神社第三殿が建立された室町後期から、泉州や紀伊で発展していったことが読み取れる。白岩丹生神社本殿については、残存している棟札のうち、明応5年棟札と永禄3年棟札(両方とも天王寺工匠の関わりを示す)のどちらかが建立年代を示すものと考えられており、文化財指定時には本殿の装飾細部が桃山風の特徴をもつことから永禄3年建立とするのが妥当と推察された。

指定種別	名称大分類	名称小分類	建立年代	形式	嵌込位置	枕捌	欄間形式	彫刻主題	工匠の出自	所在地
重要文化財	建水分神社	中殿	室町中期 1334	一間社春日造	鴨居・内法長押間		竹の節・彫刻	藤・枇杷・唐草	不明	南河内郡千早赤阪村
重要文化財	建水分神社	左殿・右殿	室町中期 1334	一間社春日造	鴨居・内法長押間		竹の節・彫刻	葡萄・唐草	不明	南河内郡千早赤阪村
重要文化財	錦織神社	本殿	正平18年 1363	入母屋造 正面千鳥破風付及び軒唐破風付	鴨居・内法長押間		竹の節・板絵	木の葉に雲、柘榴、牡丹	天王寺(繪皮大工)	富田林市宮甲田町
重要文化財	交野天神社	本殿	応永9年 1402	一間社流造	鴨居・頭貫間	○	格子	なし	不明	枚方市楠葉丘
重要文化財	飯島神社	末社春日神社本殿	室町中期	一間社流造	鴨居・内法長押間		竹の節・板絵	牡丹唐草	不明	枚方市尊延寺
重要文化財	交野天神社	末社八幡神社本殿	室町中期	一間社流造	鴨居・頭貫間	○	横板・彫刻	牡丹唐草	不明	枚方市楠葉丘
重要文化財	白岩丹生神社	本殿	明応5年・永禄3年 [1496-1506]	一間社春日造	鴨居・虹梁形頭貫間	○	竹の節・彫刻	椿・菊・犬枇杷	天王寺	有田川町小川
重要文化財	杭全神社	第三殿	永正10年 1513	一間社春日造	鴨居・虹梁形頭貫間	○	竹の節・彫刻	菊	天王寺	大阪市平野区
重要文化財	丹生官省符神社	第一・二殿	永正14年 1517	一間社春日造	鴨居・虹梁形頭貫間	○	竹の節・板絵	文様	不明	九度山町慈尊院
市指定文化財	櫻荘神社	本殿	大永年間 1521-27	三間社入母屋造	鴨居・虹梁形頭貫間	○	竹の節・彫刻	枇杷	(天王寺)	和泉市阪本町
重要文化財	観心寺	阿梨帝母天堂	天文18年 1549	一間社春日造 正面軒唐破風付	鴨居・虹梁形頭貫間	○	彫刻	飛天	(天王寺)	河内長野市寺元
重要文化財	長野神社	本殿	天文年間	一間社流造 正面千鳥破風及び唐破風付	鴨居・虹梁形頭貫間	○	横板	なし	(天王寺)	河内長野市長野町
重要文化財	金剛三昧院	四所明神社本殿	天文21年 1552	一間社春日造	開放	○	なし	なし	不明	高野町高野山
県指定文化財	西田中神社	羊宮神社本殿	室町時代後期	一間社隅木入春日造	鴨居・虹梁形頭貫間	○	現:横板	なし	不明	紀の川市中井阪
県指定文化財	東田中神社	境内社旧竹房神社本殿	桃山時代	一間社隅木入春日造	鴨居・虹梁形頭貫間	○	彫刻(現:横板)	菊	不明	紀の川市打田
重要文化財	三船神社	本殿	天正18年 1590	三間社流造	鴨居・内法長押間	※○	彫刻	飛天	根来(前身:天王寺)	紀の川市桃山町神田
重要文化財	加太春日神社	本殿	慶長元年 1596	一間社流造 正面千鳥破風及び唐破風付	鴨居・虹梁形頭貫間	○	竹の節・彫刻	椿?・菊・梅?	不明	和歌山市加太
重要文化財	泉井上神社	境内社和泉五社総社本殿	慶長年間 1596-1615	三間社流造	鴨居・頭貫間	○	立湧	なし	不明	和泉市府中町
未指定	大屋都姫神社	本殿	17世紀中期	一間社隅木入春日造 正面軒唐破風付	鴨居・内法長押間		彫刻	虎・竹	不明	和歌山市宇田森
県指定文化財	志磨神社	本殿	延宝6年 1678	一間社春日造 正面軒唐破風付	敷居・切目長押間		彫刻	鯉の蓋登り	不明	和歌山市中ノ島
県指定文化財	菟無畏寺	鎮守社	18世紀頃	一間社春日造 正面軒唐破風付	鴨居・虹梁形頭貫間	○	彫刻	飛天	不明	有田郡湯浅町栢原

表1 身舎正面の欄間意匠一覧表⁽³⁾

赤字:和歌山県類例



建立年代:明応5年(1496)もしくは永禄3年(1560)

彫刻主題:椿(左)、菊(中央)、犬枇杷か(右)



写真1 白岩丹生神社本殿の身舎正面上方

建立年代:永正14年(1517)

建立年代、欄間の納まりは第二殿も共通する。



写真2 丹生官省符神社第一殿の身舎正面上方



建立年代:天文21年(1552)

枕捌を内外障境まで延ばし、建具を配さずに開放とする。

写真3 金剛三昧院四所明神社本殿の身舎正面上方

建立年代:室町後期

平成6年の修理事業時までは欄間板が欠失していた。

腰長押(重ね長押のみ)も正面を枕捌とする。



写真4 西田中神社羊宮神社本殿の身舎正面上方



建立年代:室町後期~桃山時代

彫刻欄間は別途保管。

画題は菊で、端部に線形を施す。

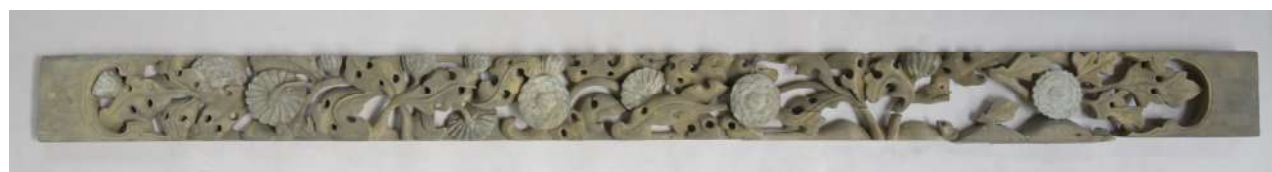


写真5 東田中神社境内社旧竹房神社本殿の身舎正面上方



建立年代：天正18年(1590)
内法長押下に半長押の枕捌が認められる。
根来大工 刑部左衛門の作。

焼失した天文年間造営の前身本殿には、棟梁は天王寺新左衛門が当たり、天王寺衆24人と地元の大工が関わっている。

写真6 三船神社本殿の身舎正面上方(南側)



建立年代：慶長元年(1596)

欄間は白岩丹生神社本殿と同仕様の納まりを見せ、彫刻の端部に旧竹房神社本殿に類似する線形を施す。



写真7 加太春日神社本殿の身舎正面上方



建立年代：17世紀中期

写真8 大屋都姫神社本殿の身舎正面上方



建立年代：18世紀

写真9 施無畏寺鎮守社の身舎正面上方

実見した彫刻欄間で白岩丹生神社と比較検討を試みると、観心寺訶梨帝母天堂(天文18年1549)や旧竹房神社本殿のほうが、やや肉厚に見える。しかし、室町後期に彫刻されたもので間違いないが、明応5年まで遡るかどうかは判然としなかった。今後、杭全神社第三殿と郷荘神社本殿の調査を行った上で検討を進める。

県内の近世建立の社殿の例では、施無畏寺鎮守社を確認している。

2. 頭貫木鼻の彫刻意匠について

(1) 尖頭形木鼻

白岩丹生神社本殿で特徴的なのが、背面頭貫の先端

が尖った木鼻の形状である。県内類例では、旧竹房神社本殿や十三神社摂社(紀美野町)、木ノ本八幡神社(木本八幡宮：和歌山市)がある。大阪府の類例では、積川神社本殿と杭全神社第三殿、旧土丸春日神社本殿(泉佐野市：現存せず)で認められた(写真10)。それぞれ、輪郭と絵様の渦の特徴は細部に差異があるものの同系統の可能性を示している。

旧竹房神社本殿の背面側頭貫木鼻については、東西で先端部の形状と絵様渦の巻き方向が異なる。西面の先端部形状は十三神社に類似し、東面は土丸春日神社に近い。

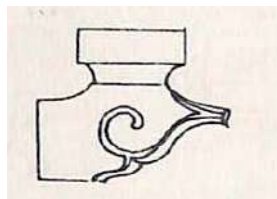
土丸春日神社本殿については、実物を確認することは叶わないが、享保2年の屋根葺替棟札に天王寺と紀州粉河村の檜皮大工の名が確認されることから、木鼻形状とともに紀伊との交流を裏付けるものとして例に挙げた⁽⁵⁾。建立棟札の天正14年(1586)頃とみられる向拝木鼻や鬘股は有していたが、身舎軸部や組物などは寛文8年(1668)棟札の頃の様式が残っていたようである⁽⁶⁾。他に、県内の近世に入った頃の事例で確認できたのは、元和5年(1619)の造営と推定されている木ノ本八幡神社の側面大瓶束上の妻飾りに配された木鼻のみである。

(2)尖頭に線形が付く木鼻

比較の基準として、意匠の関連性が多くみられる白岩丹生、積川、旧竹房を例として挙げる。白岩丹生神社本殿の向拝水引虹梁木鼻は、輪郭の曲線から反転して渦を巻き込む絵様となっており、その発展した姿が積川神社本殿といえる。さらに、旧竹房神社本殿においては、丸彫りの龍頭に発達している。以下、比較基準とした三社に県内の類例を加えて考察を試みた。



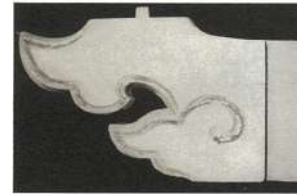
白岩丹生神社本殿(身舎背面)
明応5年(1496)・永禄3年(1560)



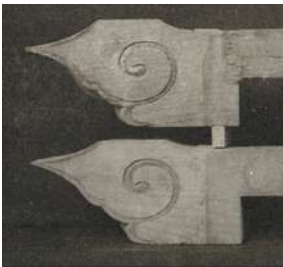
杭全神社第三殿(身舎背面)⁽²⁾
永正10年(1513)



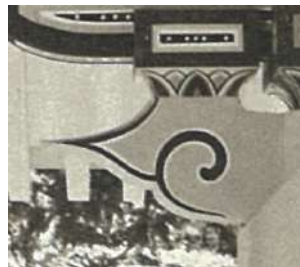
白岩丹生神社本殿(向拝)
明応5年(1496)・永禄3年(1560)



丹生官省符神社第一殿(向拝)
永正14年(1517)



十三神社撰社(身舎桁行)
室町時代後期



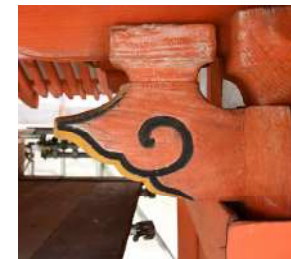
積川神社本殿(身舎北側面)
慶長8年(1603)



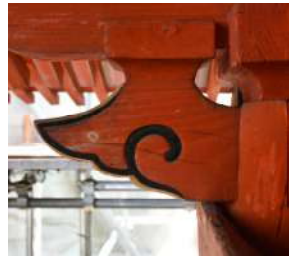
金剛三昧院四所明神社本殿(向拝)
天文21年(1552)



西田中神社羊宮神社本殿(身舎背面)
室町後期



(身舎西面背面側)
旧竹房神社本殿



(身舎東面背面側)
室町後期~桃山時代



野上八幡宮撰社平野今木神社本殿(左:向拝、右:身舎)
元龜3年(1572)



野上八幡宮本殿(向拝)
元龜3年(1572)



上岩出神社本殿(身舎側面)
文禄3年(1594)



土丸春日神社本殿(身舎背面)⁽⁷⁾
寛文8年(1668)※参考



木ノ本八幡神社本殿(大瓶束上)
元和5年(1619)



十三神社 左:撰社丹生神社本殿(向拝) 室町後期
右:本殿(向拝) 桃山時代



写真10 尖頭形木鼻の類例



積川神社本殿(向拝)
慶長8年(1603)



東田中神社境内社旧竹房神社本殿(向拝)
室町後期～桃山時代



十三神社本殿(身舎桁行)
桃山時代



天満神社末社天照皇大神宮
豊受大神宮本殿(身舎)
慶長年間



木ノ本八幡神社本殿(身舎)
元和5年(1619)



力侍神社本殿(身舎)
寛永元年(1624)

写真11 尖頭に線形が付く木鼻の類例

類例の写真は建立年代順に並べた。この木鼻輪郭は、天王寺工匠の関わりが指摘される大阪府内の室町後期以降の類例に多くみられる形状である。この様式が棟札で天王寺工匠の手によって造営されたと判明している白岩丹生神社本殿と野上八幡宮各殿にも認められることから、県内の類例を選んだ。

白岩丹生神社本殿と同様に曲線を反転させて巻き込む絵様は、丹生官省符神社各殿、野上八幡宮本殿、十三神社摂社丹生神社本殿、積川神社本殿、天満神社末社、木ノ本八幡神社本殿で確認できた。

丹生官省符神社各殿と十三神社各殿を造営した大工については明らかにされていないが、社殿各部意匠に共通点が複数みられることから、天王寺工匠もしくは影響を受けた職人の関わりを強く印象づける。また、十三神社摂社丹生神社本殿(建立年代：室町後期)の向拝頭貫木鼻は、白岩丹生神社本殿や丹生官省符神社第一殿(建立年代：永正14年)の木鼻形状に加え、獣の歯や牙が表現されている。桃山時代に建立された十三神社本殿や旧竹房神社本殿の向拝頭貫木鼻が龍頭を据えていることから、十三神社では室町後期から桃山時代までの発達過程を見ることが出来る。

近世初期にかけては、向拝は獣面の木鼻とし、身舎

に同形状の木鼻を配するようになる。

(3)鳥兜に若葉状の突起を組み合わせた木鼻

この種類の木鼻の説明は、郷荘神社本殿(和泉市)の既往調査に詳しいので引用する⁽³⁾。先端の嘴様線形から反転曲線が連なり、下部に渦を巻き込み、上部の柱際に反返った若葉様の突起を付ける。類例として、白岩丹生神社本殿、岸和田市の大威徳寺多宝塔(永正12年1525)、堺市の多治速比売神社本殿(天文10年1541)が挙げられている。大阪府内では、他に積川神社本殿と河内長野市の長野神社本殿(天文年間)に存在を確認した。そのほか、和歌山県内においても類例が認められたので紹介する。



白岩丹生神社本殿(身舎)
明応5年(1496)・永禄3年(1560)



丹生官省符神社第一殿(身舎)
永正14年(1517)



東田中神社境内社旧竹房神社本殿(身舎)
室町後期～桃山時代



野上八幡宮本殿(身舎)
元龜3年(1572)



清水寺本堂
17世紀前期



力侍神社摂社八王子神社本殿(身舎)
寛永11年(1634)

写真12 鳥兜に若葉が付く木鼻の類例

白岩丹生神社本殿と比較し、明確に類似しているのは以上(写真12)の類例である。注目すべきは、天王寺工匠が造営した野上八幡宮と同じ旧野上町に、清水寺本堂(17世紀前期)という改造が著しいが、類似した木鼻を残す建物が存在していることである。

3. 墓股などの彫刻主題について

墓股でも、類例として挙げてきた社殿に彫刻主題や脚先の意匠につながりを感じさせる。積川神社本殿には、白岩丹生神社本殿と旧竹房神社本殿、双方と共通した特徴を有している点が興味深い。正面墓股の主題については、三社とも尾長鶏・松を配している(積川神社本殿は流造で当該箇所は北の間)。白岩丹生神社本殿と積川神社本殿の身舎正面では、墓股の脚先や上方の実肘木も類似している(写真13)。



白岩丹生神社本殿(身舎正面)



積川神社本殿(身舎正面北の間)



旧竹房神社本殿(身舎正面)

写真13 身舎正面墓股の尾長鳥彫刻の比較

【その他の主な県外類例】

○木の葉に筆

大阪府：錦織神社本殿(正平18年1363)
兵主神社(桃山時代)

○貝類

大阪府：意賀美神社本殿(嘉吉2年1442)
郷荘神社本殿(大永年間)
多治速比売神社本殿(天文10年1541)
泉井上神社境内社和泉五社総社本殿
(慶長年間)

兵庫県：本興寺三光堂(尼崎市)

(室町建立、元和3年1617移築)

旧竹房神社本殿と積川神社本殿については、他にも「木の葉に筆」や「貝類」など多くの共通主題がある(写真14)。こうした主題は、大阪府はもちろん和歌山県内にも確認され、「木の葉に筆」の彫刻は、白岩丹生神社と同じ、有田川町に所在する長楽寺仏殿(天正5年1577：裳階正面手挟)をはじめ、十三神社本殿(向拝墓股)、加太春日神社本殿(背面墓股)にあり、「貝類」の彫刻は西田中神社羊宮神社本殿(手挟)、加太春日神社本殿(身舎南側面)などにも用いられている。



旧竹房神社本殿 頭貫木鼻(身舎背面西側：木の葉に筆)



積川神社本殿 墓股(身舎北妻：木の葉に筆)



積川神社本殿 墓股(身舎南妻：貝類)



旧竹房神社本殿 墓股(身舎西面：貝類)

写真14 旧竹房神社本殿と積川神社本殿の「貝類」と「木の葉に筆」

第2章 和歌山における天王寺工匠の関わり

1. 白岩丹生神社(有田川町)周辺での関わり

前章では、白岩丹生神社本殿の棟札には天王寺工匠の名が記され、本殿意匠には類例との共通点が多くみられること、近在する長楽寺仏殿の手扶に「木の葉に筆」の彫刻が残されていることを紹介した。

白岩丹生神社本殿の明応5年(1496)造営棟札には天王寺工匠の「藤原守次」、永禄3年棟札(1560)には「藤原家次」、「藤原宗広」の記名が残る(表2)。まず、明応棟札の「藤原守次」という名については、同じ旧金屋町に所在する法音寺本堂の康正3年(1457)修造棟札写に「大工 藤原盛次」の名を確認した。一字違うものの、読み方は同じであり、同じ系譜の大工と考えている。

続いて、永禄棟札の檜皮大工「藤原家次」、「藤原宗広」については、広川町に所在する広八幡神社本殿の永禄12年上葺棟札に「藤原朝臣家次」、「藤原朝臣宗広」として名が認められる⁸⁾。

そのほか、事例として注目しているのは、雨錫寺阿弥陀堂(有田川町)である。阿弥陀堂は永正11年(1514)頃に建立されたと考えられているが、厨子・須弥壇の絵様部材からは、建立年代が降ることが指摘されていた。しかし、平成10年の修理事業の際には、阿弥陀堂本体との取り合い部分で時代差を証明する風食差が認められず、両者の建立に差をつけることはできないとされた。しかしながら、建築様式上の相違点があり、厨子・須弥壇の造作仕事のより丁寧な細工からは、阿弥陀堂本体と工匠が異なっていたことが推定されている。それを踏まえて、厨子虹梁型頭貫木鼻と持送りの絵様を見ると、これまでに紹介してきた類例に近いことがわかる(写真15)。持送りの形状は、白岩丹生神社本殿の向拝水引虹梁木鼻と同様に輪郭の曲線から反転して渦を巻き込む絵様となっている。厨子の木鼻については、法道寺多宝塔(堺市：正平23年1368)、日根神社本殿(慶長7年1602)や広八幡神社摂社天神社本殿(慶安5年1652)に類例が認められ、前章の例と別系統の絵様で渦を上下にふたつ配するものである。そのほか、阿弥陀堂背後の一段上がった山の緩やかな傾斜地に建つ河津明神社の前身本殿(慶長期)の向拝木鼻が同系統を示す。今は解体されてしまったようだが、水引虹梁木鼻に特徴が認められる(写真16)。

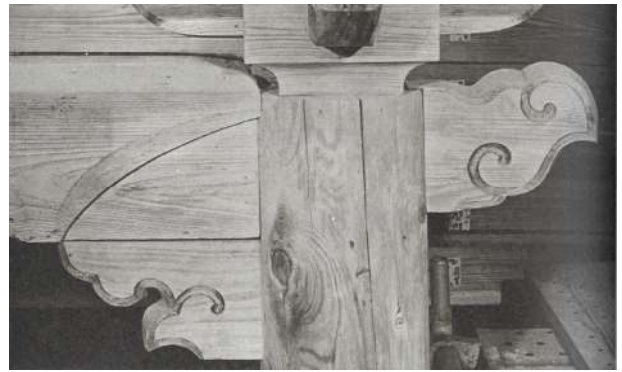


写真15 雨錫寺阿弥陀堂厨子の木鼻と持送り



写真16

旧河津明神社本殿の
向拝木鼻

また、湯浅町には前章の身舎正面意匠の類例で挙げた施無畏寺鎮守社が存在することから、少なくとも18世紀までは何らかの交流があったと考えている。

2. 野上八幡宮(紀美野町)周辺での活動

野上八幡宮の社蔵の記録によると、弘治3年(1557)から元亀3年(1572)にかけて造営に関わった工匠は「大工天王寺新左衛門国次」である。天文6年(1547)建立の三船神社の前身社殿(焼失)の造営にあたった「天王寺新左衛門と申物トウリヤウ」と同一人物と言われている⁹⁾。そのほか日野上町の福井地区に所在する小川八幡神社の記録¹⁰⁾によると、本殿(現存せず)を造営した大工として「藤原重左衛門」(天正8年1580)と「藤原朝臣家次」(文化10年1813)の名前がみられ、近世まで天王寺工匠の関わりが想像できる。

また、福井地区には前章の木鼻類例で紹介した清水寺本堂が所在する。紀美野町には前章で多く取り上げた十三神社各殿も所在している。

3. 東田中神社(紀の川市)周辺での関わり

東田中神社境内社旧竹房神社本殿については、造営した大工の出自を示す資料が見つかっていない。しかし、類例と比較検討した結果、天王寺工匠の関わりを推定している。隣りには、本殿(延宝8年1680)が建っており、大阪府の近世社殿と共通する形式を有している。近隣には、元は同じ田中荘八社と伝わる西田中神社羊宮神社本殿(室町時代後期)と八幡神社本殿(寛永

12年1635)が所在する。特に、羊宮神社本殿には、旧竹房神社本殿と同じく、身舎正面の内法長押枕捌と欄間を有する納まりと「貝類」(手挟西側)の彫刻という共通点が認められる。向拝木鼻には「鯨」の彫刻、脇障子(西側)に「俱利伽羅龍王」の彫刻が施されているが、東田中神社の若宮社(現存せず)にも向拝木鼻に鯨の彫刻、脇障子に俱利伽羅龍王の彫刻が確認されていた⁽¹⁾。類例として、「鯨」の彫刻は法道寺多宝塔(堺市)、「俱利伽羅龍王」の彫刻は、同じ紀の川市の桃山町に所在する三船神社本殿(天正18年1590)にみられる。同じ桃山町では、小規模な一間社春日造の十二社権現社本殿(16世紀後期)に尖頭に線形のある木鼻と上部に突起が付く鳥兜状木鼻がみられる(写真17)。



写真17 十二社権現社本殿木鼻(左：向拝・右：身舎)

4. 和歌山市周辺での系譜関係

和歌山市において、天王寺工匠の名が認められる建物は確認できていないが、寺社設計の流派として「四天王寺流」に属し、源流とされるのは紀州が出身地の平内と鶴家である。四天王寺流を称した背景として、中世から近世初頭にかけて、紀州の工匠は、天王寺工匠の建築技術を学んで、彫物に長じ、桃山的な建築様式を形成していたものと考えられている⁽¹²⁾。江戸初期の木割書「匠明」を著したことでも知られる平内政信は、和歌浦の天満神社(慶長11年1606)の造営に携わっている。天満神社の身舎正面は、内法長押を枕捌としないが、鴨居との間に彫刻欄間を納める。同様の納まりが根来大工の刑部左衛門(鶴家は刑部を称している)が造営した三船神社本殿(写真6)にみられ、四天王寺流と関連する意匠とも考えられる。建立した工匠については不明であるが市内では類例として大屋都姫神社本殿が挙げられる(写真8)。そのほか、前章で紹介したように、木鼻彫刻などに、類例と多くの共通点が木ノ本八幡神社本殿に認められる。

第3章 おわりに

和歌山において、天王寺工匠の名が最初に認められるのは白岩丹生神社本殿の明応5年(1496)と永禄3年(1560)棟札である(※法音寺棟札は保留)。続いて、広八幡神社、野上八幡宮の棟札でも記名があり、室町後期までは直接、造営に関わっていたことが確認できた。

近世初期にかけては、地元の大工が天王寺工匠の技

術を参考として四天王寺流を形成していったように、他の地域と比較しても、彫刻で建築を装飾する技法が特に発達していたことを再確認した。

今後は、県内において泉州や摂津以外の影響を受けた社殿意匠についても注目していきたいと考えている。

【注】

- (1) 太田博太郎・稲垣栄三 編 2011『中村達太郎 日本建築語彙』
「枕捌」とは柱などの位置において、長押が「見廻し」になる場合に、その留まりの構造をいう。
- (2) 櫻井敏雄・多田準二 1983『大阪府神社本殿遺構集成』財団法人法政大学出版局
- (3) 東野良平 2014「郷荘神社本殿の建築」(『和泉市歴史的建造物調査報告書Ⅰ』和泉市教育委員会)
大阪府における類例の欄間主題については、東野良平氏の調査成果から引用した。
- (4) 1957『重要文化財積川神社本殿修理工事報告書』大阪府教育委員会
修理技術者の竹原吉助氏が類例として、東田中神社境内社旧竹房神社本殿の彫刻欄間を挙げている。
- (5) 1987『大阪府の近世社寺建築 近世社寺建築緊急調査報告書』大阪府教育委員会文化財保護課
- (6) 1994『日根荘総合調査報告書』財団法人 大阪府埋蔵文化財協会
- (7) 土丸春日神社本殿の写真は往時の姿を撮影した個人から提供を受けた。
- (8) 1996『社寺の国宝・重文建造物等 棟札銘文集成—近畿編二—』国立歴史民俗博物館
- (9) 鳴海祥博 2002「紀州大工と江戸時代の装飾建築—大崎八幡宮をつくった人々—」

- (10) 1985『野上町誌 下巻』野上町
- (11) 天沼俊一 1946「日本古建築細部五題補遺」(『史跡と美術 十六号ノ五』 一條書房)
- (12) 内藤昌 2013『江戸と江戸城』株式会社講談社

※類例の木鼻と墓股写真の一部は、和歌山県・大阪府内の修理工事報告書掲載写真から引用した。

【補足資料】

和暦	西暦	本殿 修理内容	史料	職人名・人数	棟札墨書記載事項		追記・修理の詳細
					無住地・出身	日時	
明治5	1496	木建寺	棟札 (文化庁蔵写し書あり)	大工 右衛門尉藤原宗次 その他20人	天三寺	二月十日 新宮 二月十八日 桑上	二月十日費なし、本殿のほか、三社、庫裏、鳥舎も修められた。
永享3	1560	屋棟葺替(築建立)	棟札	大工 藤原家次 力半 藤原家三 その他数人 塗皮大工 藤原宗成	天三寺 門天正寺住	九月二十日 桑上	
元禄9	1623	屋棟葺替	棟札	大工 藤原宗中宗次助次郎 塗皮大工 宗清宗経 力半 宗野次郎助次郎	天三寺	九月十六日 新宮宮	
寛文7	1667	屋棟葺替	棟札	大工 藤原宗中宗次助次郎 塗皮大工 松吉宗経宗次助次郎	天三寺住 紀伊和歌山	二月十五日 新宮宮	
宝永4	1707	修繕 (内容記載なし)	棟札	大工木口 右衛門藤原朝臣宗久		四月十七日 新宮宮	
寛保元	1741	修理 (内容記載なし)	棟札			九月 桑上	
延享2	1745	修理 (内容記載なし)	棟札			五月初八日 桑上	
寛延2	1749	屋棟葺替	棟札	大工 直兵衛 力半 物左衛門	小田原 新山新中延	八月十七日	
天明8	1771	修繕 (内容記載なし)	棟札	大工 兵衛良藤原宗久		四月朔日 新宮宮	
寛政2	1790	屋棟葺替 金物修復	棟札	大工 中助藤原宗次 力半 高七 塗皮大工 高善藤原宗家次	和歌山住	二月四日 新宮宮 四月廿一日 上湯宮	
文化5	1808	屋棟葺替 金物修復 威頂及び懸魚の取替 貝合屋根勾配の変更	棟札 正面威頂板墨書	番匠 基右衛門 徳兵衛 塗皮大工 宗助藤原宗次	三川住	二月十六日 下湯宮 十二月四日 上湯宮	
天保11	1840	屋棟葺替 金物修理	棟札	番匠 宗兵衛 若年 宗成 塗皮大工 洋五郎	中井原 金屋 金屋 和歌山住	二月六日 下湯宮 六月初日 上湯宮	
明治初年		塗替札の張り					
明治40	1907	洋殿建立にない、 現在棟は後継 式二の形跡 痕跡の取替	町内住民書き取り 漢字書本工書書				
昭和三〇	1955		重要文化財に指定				
昭和三五	1960	解体修理	修理工事報告書 取替勾配計算				
平成元	1989	屋棟葺替					
令和5	2023	屋棟葺替 部分修理					

表2 白岩丹生神社本殿の修理年表

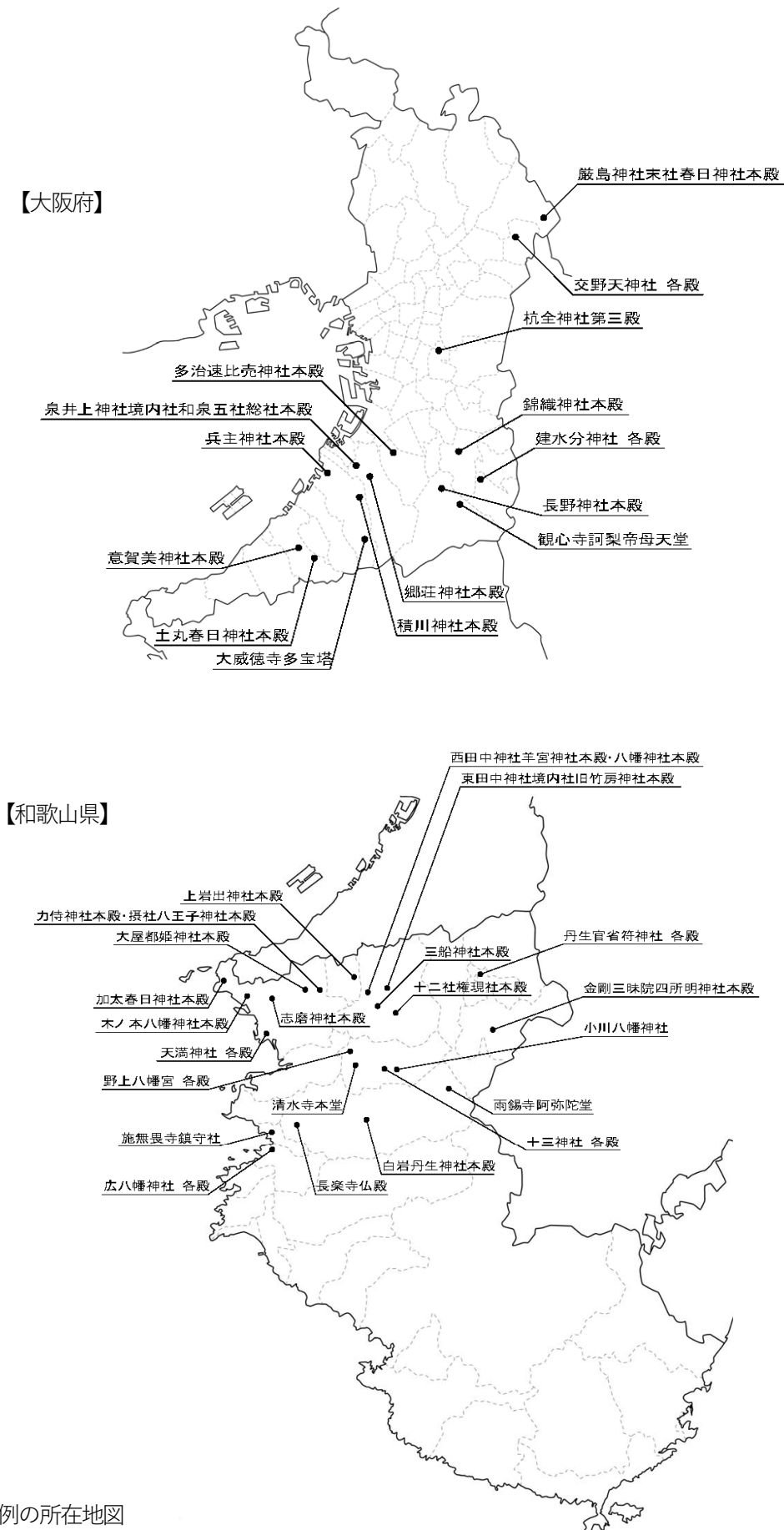


図1 類例の所在地図